

《学会参加記》

東京・上海・フフホト：盧溝橋事件80周年関連の会議に参加して

(日本学術振興会特別研究員) 関 智英

盧溝橋事件から80周年の節目にあたる今年、関連するシンポジウムが中国を中心に各地で開催された。幸い筆者もそのうち東京・上海・フフホトで開かれた3つの会に参加・報告する機会を得た。以下、それぞれの会議と報告テーマ（題名は配布された会議論文に拠る）の紹介を中心に、近年の中国における日中戦争研究がいかなる問題関心の下、進められているのかをお伝えしたい。

東京

最初は7月1日に東京の明治学院大学で開催された「盧溝橋事件80周年国際シンポジウム：戦争をどう乗り越えるか～歴史研究の現場からのメッセージ」である。同シンポジウムは華人教授会議と中国抗日戦争史学会の主催、公益財団法人東華教育文化交流財団・中国社会科学院近代史研究所『抗日戦争研究』編輯部の協賛で行われた。

まず2つの基調報告、村田忠禧「認識の共有化の前提としての歴史事実の共有化の重要性」・王建朗「戦後対日处置構想与実践的変化」の後、以下の三部構成で報告が行われた。

第一部「史実が語る戦争と拡大への道」

井上久士「抗日民族統一戦線と日本」・賀江楓「1940-1942年閻錫山と對伯工作的歴史考察」・趙軍「『英雄』未満、『凡人』以上：『訊問調書』から見る日中戦争の中西功」・周東華「仏已成魔：淪陥初期の杭州日華仏教会」・田中寛「文学で刻む日中戦争の記憶：戦時下に作家は何を見、何を感じたのか」・劉本森「英美学界的盧溝橋事変研究」

第二部「“抗戦”の中国と日本」

桜井良樹「国際関係の中の華北駐屯日本軍」・趙秀寧「抗戦時期日本対華資源の另類略奪：青島特別市“献銅運動”的研究」・戸部健「南開学校とYMCA：日本軍による南大攻撃（1937年7月）の遠因」・李玉蓉「從進入山西到立足太行：試論八路軍後勤供給与軍事財政的創建」・程斯宇「中共華北抗日根據地的整風審幹運動」・高瑩瑩「霧社起義与日本の理蕃政策」・関智英「吳佩孚擁立工作と日支民族会議」

第三部「“歴史認識問題”と日中関係への提言」

鹿錫俊「戦争はなぜ勃発したのか：当局者の認識から見る「コミニテルン陰謀論」の虚構」・高士華「論中日両国との戦時・戦後歴史連續性」・楊東「循名責実：中共關於“抗日戦争”的概念表述与話語行動」・天児慧「日中関係の直面する課題と今後の展望」・姫田光義「『撫順の奇蹟』を世界歴史記憶遺産に！」

本シンポジウムには日本・中国の学者が参加したが、日本側の報告者に比較的ベテランが多かったのに対し、中国側は、日中戦争時期の仏教や地方都市の状況分析といった新たな問題関心から報告を行った若手研究者の姿が目立った点で対称的であった。彼等の中には、本シンポジウムが初訪日という研究者も少なくなく、今後ますますの相互交流が望まれよう。

報告の最後には、今年80歳を迎える姫田光義中央大学名誉教授が登壇し、開口一番唱歌「この道」を熱唱。近年の日本社会の雰囲気に対し「この道はいつか来た道～」と警鐘を鳴らした。これには会場全体から盛んな拍手がおこり、懇親会では、中国の若手研究者が、毛沢東とも握手した姫田氏と争って握手・献杯を繰り返す展開となった。

本シンポジウムは、報告時間は各20分程度で質

疑応答や議論の時間は設けられず、学術面よりも日中の人的交流に力点が置かれていた印象を持ったが、管見の限り日本で開催された唯一の関連シンポジウムという点で貴重な機会であった⁽¹⁾。

ただ事前に広く告知されなかったこともあり、日本人の参加者が少なかったことは惜しまれる。また日本側の報告には中国語版が用意されていなかったので、中国人研究者にとって内容理解が難しかったのでは、との懸念を持った。

上海

続いては、9月2日・3日に上海社会科学院で開かれた「抗日戦争史研究新趨向」国際学術研討会である。同会は上海社会科学院歴史研究所と南開大学歴史学院が主催し、中国・台湾・日本に加え、ロシアからも参加者があった。

午前中は冒頭、主催者を代表して上海社会科学院の馬軍氏より「同盟戦争視野下的中国抗日戦争」と題する報告が行なわれた後、全員参加の第一セッションでは各20分で以下の報告が行なわれた。

第一セッション 「抗日戦争史研究的新趨向与新理論」

劉維開「『抗日戦史』的編纂与出版」・段瑞聰「日本学界關於中日戦争和亞洲太平洋戦争称呼之討論」・陳雁「為何要從性別視角研究抗戦史」・羅曼諾夫「21世紀俄羅斯的中国抗日戦争史研究」・蔣傑「2000年以来法国的中国抗戦史研究述略」・葉銘「新世紀以来台灣地区抗日戦争史研究述評」

このうち、段瑞聰報告では、日本社会一般における「先の戦争」は日米戦争を指し、中国での認識との間に齟齬がある点が改めて確認された。映画「ラスト、コーション(色・戒)」のモデルとなつた鄭蘋如を取り上げた陳雁報告はジェンダーの視点から日中戦争を検討したもので興味深かった。

ロシア科学アカデミー極東研究所首席研究員のロマノフ教授からは、近年ロシアで出版された全12巻からなる『大祖国戦争1941-1945年』(原題 *Великая Отечественная война 1941-1945 годов*)では、日中戦争におけるソ連の役割が注目されている点、また従来ヨーロッパ戦線を中心に描かれてきた第二次世界大戦を、日中戦争に注目することにより相対化する必要性が唱えられている点などが紹介された。

蔣傑報告では、フランスでの日中戦争研究は、歴史研究全体からみて小規模であるものの、占領地研究などで相応の成果があることが紹介された。

午後からはテーマごとに分かれ、質疑応答も含め各15分で、以下の報告が行なわれた。

第二セッションA 「淞滬抗戦与上海社会」

張雲「上海抗戦在中国抗戦和世界反法西斯戦争中的歴史作用和特殊地位」・江文君「上海対抗日戦争の貢献」・楊維真「顧祝同与1937年淞滬抗戦」・蔣寶麟「一二八」至“八一三”期間の淞滬警備司令部与上海市保安隊」・岳欽韜「淞滬会戦時期上海鉄路系統の人口傷亡与財産損失」・林盼「近観戦争：蔣維喬日記中的抗日戦争」

第二セッションB 「戦時中共抗日根拠地与大後方社会」

楊豪「“另類”之相：華北根拠地“非婚関係”問題新探」・孫雲「典範教育与新人再造：抗日戦争時期延安辺区二流子改造運動再認識」・鄭会欣「党内競選与派系闘争：親歷者筆下的国民党“六全”大会選舉」・嚴海建「抗戦後期大後方の経済危機与道德人心：基於国民党自体系的觀察与剖析」・張劍「中国科学社在大後方」・李在全「抗戦時期的戰区檢察官：党国体制与戦時体制の司法交集」

第三セッションA「戦時政治与外交」

鹿錫俊「対蘇考量与国民政府的和戦抉択」・肖如平「蒋介石・汪精衛与1935年河北事件交渉」・閔智英「擁立吳佩孚工作与日支民族會議」・賀江楓「1935華北危局与地方実力派の生存邏輯：以晋綏軍為中心的考察」・楊衛華「中国対德意伝教士の間諜想象与戦時控制（1937－1945）」・王美平「日本政府対国民革命的認知・態度与政策」

第三セッションB「抗戦時期の軍事与軍隊」

齊小林「浅議中共平型關戰鬪的决策・過程及反思」・高翔「抗戦前国民革命軍制式武器選定工作研究」・張帥「抗戦中国戦俘的数量問題及其研究展望」・皮国立「旧解説与新詮釈：戦時報刊中的日軍細菌戦（1937－1945）」・鄒燦「聖戦」話語下的七七紀念：日本国民眼中的中日戦争」・楊善堯「中・美双方抗戦影像的紀錄与異同」

二日目

第四セッション「抗戦史新檔案資料与数拠庫」

李玉「美国駐華領事館文献与中国抗日戦争研究芻議：以前期抗戦為中心」・董佳「好牌為何変輸牌：從美国檔案看戦時美国的国共抉択」・賈欽涵「國際視野下中共抗戦資料」数拠庫建設概況」・馬軍「甘慧傑与『宗方小太郎日記』的翻訳」

第五セッション「中日関係の歴史与現実」

齊春風「『支那事變画報』研究」・沙青青「從“中東路”到“九一八”：張学良处置政策的演変軌跡」・殷昭魯「論1970年代前後台湾当局対釣魚島問題の处置与応対：以与美日交渉為中心的考察」・李雲波「実力・法理・利益：再論中日関係中的釣魚島・琉球群島問題」

第六セッション「戦時淪陷区社会与文化」

張同樂「試析『中国公論』的奴化宣伝」・葛濤「灰色地帯」中的掙扎：“孤島”与淪陷時期（1937－1945）上海文化人的行為分析」・閔根真保「「上海ゲットー」における日本軍のユダヤ人管理システム」・金志煥「抗戦時期上海物価統制与商業統制総会」・李秉奎「北平淪陷後の“生存”・“妥協”与“親仇”觀念：『北平日記』閲読札記」・陳曄「抗戦時期の海派書画家」

個別報告では、淞滬戦争など戦争に直接関係するテーマに加え、共産党統治区における「非婚（非正式な婚姻関係）」や「二流子（ならずもの）」への対処といった社会問題、戦区検察官など法制関係、米国議会図書館所蔵の史料を用いた中米関係、日本軍占領地の事情なども取り上げられ、中国での問題関心の広がりを感じさせた。こうした報告者の多くは「七〇後」「八〇後」に該当する若手研究者である。

とりわけ筆者にとって印象的だったのは、日本占領地をテーマにした報告である。日本の占領地で発行されていた雑誌が奴隸化の役割を果たした、と結論づける当該分野の「大家」の報告に対し、中国人研究者からも表層的な分析に止まっていることを指摘する声が多数挙がったのである。少なくとも学術界では、占領地研究をタブー視する雰囲気はなく、またその分析も深化しているようである。

ただこうした中国での研究の進展は、ともすれば、中国の研究界以外の先行研究の軽視や、中国で入手できる史料だけでも研究ができる、という意識にも繋がっていないだろうか。日中関係を扱っているにも拘わらず、日本の先行研究をほとんど把握することなく行われた報告に、筆者はその片鱗を見る思いがした。後述するように、これ

は日本の研究者がその成果を如何に発表していくのか、ということとも関わる問題だろう。

フフホト

最後は9月9日・10日にフフホトの内蒙古師範大学で開催された「抗日戦争時期的内蒙古」国際学術研討会である。筆者にとって2001年3月以来のフフホト訪問だったが、空港から市内へむかうリムジンバスの車窓から、数年前に完成したフフホト東駅、大規模な商業施設、地下鉄建設現場などが見え、隔世の感を強くした。

今回は研討会の数日前にフフホトに到着し、市内を周ることができたので、その様子も紹介しよう。市内バス（1元均一）を駆使することで、内モンゴル博物院・大召（「召」はモンゴル語で「廟・寺」の意味）・シリト（席力図）召・綏遠將軍衙署（1937年に成立した蒙古聯盟自治政府もここに置かれた）など、市内の名勝はほとんど見学することができる。印象的だったのは、市内の到る処に掲げられた「以優異成績迎接党的十九大勝利召開（卓抜した成果で、黨の第十九回全国代表大会の成功裏の開催を迎えよう）」のスローガンと「热烈慶祝内蒙古自治区成立70周年」の垂れ幕である。

「成立70周年」とは、1947年5月に中国共産党の主導の下、ウランフを主席に成立した内蒙古自治政府の成立を以て、同自治区の創立としているということである。これは人民共和国の成立から遡ること2年半前のことである。後述するように本年は蒙疆政権の成立80周年もあるが、これはウランフの内蒙古自治政府成立からちょうど10年前のことであった。

内モンゴル博物館（1957年開館）を改組して2007年に開館した内モンゴル博物院では、入口から入ってすぐの大ホール上に麗々しく掲げられた「建設亮麗内蒙吉 共円偉大中国夢（輝かしい内モンゴルを建設し、偉大な中国ドリームを共に成就しよう）」という字が目に飛び込んだ。これ

は本年8月に中央政府代表団を率いてフフホトを訪問した全国政治協商会議主席俞正声が自治区成立70周年の記念式典で贈った言葉で、字は習近平国家主席によるものである。ちなみに現在は内モンゴル自治区博物館となった、かつての内モンゴル博物館にも同じ習近平の字が掲げられていた。

日本でも、今年7月30日に内モンゴルの朱日和合同戦術訓練基地で大規模な軍事パレードが行われたことは報道されたが、フフホト市内の雰囲気は、中央政府との近さ（言葉を換えれば影響力の大きさ）を感じさせるものだった。

こうした事情は本研討会にも微妙に影響していたようで、研討会では宴席が設けられることはなく、三食全てがカジュアルなビッフェ形式だった。「中央八項規定」（いわゆる贅沢禁止令）を遵守した結果という。

さて研討会は、フフホト市内から25キロほど南に離れたホリンゴル県（モンゴル語で20軒の家の意）盛樂経済園区にある内蒙古師範大学盛樂校区（盛樂は北魏時期の地名）で開かれた。市内からは路線バスを乗り継いで2時間弱かかるが、途中沿道には農地や工場が続き、盛樂校区の周囲にも蒙牛（伊利と共に中国の二大乳業）、宇航人（健康食品会社）や燕京ビールの工場がある。

今回の会議に参加した田中剛氏は、フフホトに留学時に盛樂校区附近で植樹をしたといい、周囲に何もなかった20年前と現状を比べて感慨深げであった。

研討会は内蒙古師範大学学術期刊社・内蒙古師範大学歴史文化学院及び『抗日戦争研究』編輯部の主催で開かれた。当初の通知では、研討会のテーマは、80年前に成立した蒙疆政権のことであった。

蒙疆政権とは、1937年の盧溝橋事件勃発後、内モンゴルに軍を進めた関東軍が、内モンゴルの高度自治を求めて活動していたデムチュク・ドンロブ（徳王）らと協力して樹立した蒙古聯盟自治政府

及びそれと隣接した晋北自治政府（山西省北部）・察南自治政府（チャハル省南部）の総称である。ただ蒙疆政権を看板に掲げることはさすがに難しかったようで、最終的には「抗日戦争時期的内蒙古」に落着いたようだ。

9月9日、8時から会議の主旨説明が行われた後、9時からの全体報告では各20分で以下の報告が行なわれた。

小林元裕「東亜新秩序」と内モンゴル」・祁建民「戦後蒙疆政権研究的回顧与展望」・李国芳「抗戦勝利初期中共民族政策在東蒙的碰撞」・薛毅「日本侵華時期對蒙疆地区煤礦的侵占与統制」・岳謙厚「中共戦後国民政府善後救濟工作的因応：以晋綏察分署救濟活動為中心」・丁曉傑「梅棹忠夫与蒙古草原生態調査」

11時30分から14時までの少し長い昼休みの後、午後は3つのセッションに分れ、各10分で以下の報告が行なわれた。

第一組

閔智英「關於“蒙疆”概念之一考察」・張天政「寧夏馬鴻逵部与綏西戦役」・劉勇「楊家河与綏西抗戦」・孫丹年「為抗戦而設立的中美合作所陝墳訓練班」・孟和宝音&張若愚「The Historical Background and Significance of the Movement of Genghis Khan's Mausoleum during the Period of Anti-Japanese War」・趙殿武「白鳳翔將軍抗日殉國史実考」・劉曉堂「包綏地区受降史実疑誤考辨」・李力「国共両党綏遠抗戦比較研究」・葉銘「抗戦時期軍令部作戦指導業務初探」

第二組

張建軍「北平淪陷前後の蒙藏学校」・田中剛

「日本敗戦前後の「蒙疆政権」留日学生」・娜荷芽「偽満洲国時期的蒙古人中等教育：以興安学院為例」・包賀喜格図「善隣協会在内蒙古地区的文化侵略活動研究：以其日語教育活動為中心」・王征「論日本侵華時期對我国内蒙古東部的經濟略奪」・宋從越「偽満洲国的勞働統制法律制度：以偽満時期東部内蒙古為中心」・齊百順「試論日本侵華時期對我国内蒙古東部的經濟略奪」・金姝利「論偽蒙疆地区政権下察哈爾・綏遠地区罂粟鴉片的種植」・張洪鵬「從戰爭惡魔到人性回帰」

第三組

広川左保「烏蘭察布盟的建立和作用」・李常宝「中共大青山抗日游擊工作述評」・石双柱「東蒙地区抗戦勝利後の政治力学与中共民族政策的変遷：以中共整合東蒙自治力量的策略調整為主綫」・哈日巴拉「偽“満洲国”的“土地奉上”施政与戦後中共的内蒙古政策」・張榮傑「雪災救済与辺疆政争：以綏遠抗戦前蒙古旗雪災為中心」・張連傑「試論1933年熱河抗戦中的幾個問題」・劉志鵬「国民党“華北党務辦事処”考釈」・霍耀林「鄭家屯事件についての一考察」・陳仕平「抗日戦争時期全民族愛国主義精神実現歴史超越の機理及其啓示論断」

開催地やテーマのおかげで、本研討会ではモンゴル族研究者が多く参加した（ただモンゴル国からの参加者はなかった）。その研究テーマのほとんどは蒙疆政権や興安省（満洲国内のモンゴル地域）、日蒙関係に集中していた。日本の先行研究も多く参照されており、研究のスタンスは日本のそれに近い印象も受けた。また中には研討会のテーマとして「抗日」は相応しくない、と考える研究者もあったと仄聞する。

10日は希望者により百靈廟への考察旅行が行な

われた（参加費一人200元）。百靈廟はフフホト市内から二百数十キロ離れた、パオトウ市のダルハン・ムミンガン（達爾罕茂明安）聯合旗（1952年にダルハン・ムミンガン両旗が合併した）の所在地で、フフホト市内からは車で4~5時間要する。このため当日は5時から朝食をとり、6時に師範大学盛楽校区を出発した。

フフホト市内からは岩の露出した山がちの地形となる。これは陰山山脈で、山道を北西に進み、武川県を経てダルハン・ムミンガン聯合旗に入る頃には、周囲は一面の平原となった。遠くには観光ゲルが見え、途中には養蜂場や農地もあったが、基本的には平原が続き、大規模な太陽光発電のシステムや風力発電の風車も確認された。シラムレン召（普会寺）を正面から見学した後、百靈廟には正午前に到着した。

百靈廟は民国時期に徳王と共に内モンゴルの高度自治運動に関わったモンゴル王公の一人ウンデンワンチュク（雲王）の居所だった場所で、1930年代にはしばしば自治運動の拠点となった。

1936年には傅作義率いる中国軍が徳王らを攻撃し、百靈廟を占領した（綏遠事件）。この際、徳王麾下の蒙古地方自治政務委員会保安隊が徳王に反旗を翻し日本人顧問らを殺害したが、それを記念した「百靈廟抗日武装暴動紀念碑」が百靈廟鎮内の女兒山山頂に建てられていた。

まとめ

さて以上簡単に3つの会議の事情を紹介したが、その状況を総括すると、以下のようにまとめることができる。

1. 幅広い研究テーマ

「抗日戦争80年」というテーマはあったものの、実際に報告されたテーマの幅は緩やかで、多様な研究状況が報告された。こうした、ある事件の節目を主な根拠に、シンポジウムを開いたり、論文集を編んだりする「記念史学」には異論もあるか

もしれないが、「看板」を掲げることで、地域を超えた大規模な研究者交流が出来たならば、有意義な催しだったと言えるだろう。

2. 各種史料の整備

日中戦争研究だけではないが、各種史料集の編集・公刊、檔案の整理、デジタルアーカイブスの構築が中国各地で積極的に進められていることが紹介された。

例えば戦時中に大阪毎日新聞社発行の『支那事変画報』はデジタル化されたものが研究材料になっているという。また内モンゴルでも満洲国興安省に関する日本語の文書が、東北各地の檔案館からフフホトに集めて翻訳され、将来的には公刊されるという。これも潤沢な資金の裏付けがあつてのことだろう。

ただ少々気がかりなことは、こうした動きは必ずしも情報公開とは言えない点である。というのも、さまざまな史料集が出版される一方で、中国での檔案館利用には厳しい制限が付くようになっているからである。

編纂・刊行史料は充実させるが、歴史学者が自由に史料の“ヤマ”に分け入ることは制限する。穿った見方をすれば、史料のレベルで研究を一定の枠内に収めようとしているように見える。たとえ中国で日本のアジア歴史資料センターに類似したシステムが構築されたとしても、それが如何に運用されるのかは予断を許さない。

3. 「八年」か「十四年」か

いずれの会議でも、2017年1月に中国教育部から出された、中学・小学課程の教科書の「抗戦八年」の記述を「抗戦十四年」とする、という指示について話題になった。

「東北など局地的な抗戦に注目すれば抗戦十四年にも道理があるし、全面的な抗戦ということならばやはり八年抗戦だ」、「いやいや抗戦八年だ。共産党の歌でも“他堅持抗戦八年多”と歌っているではないか」……など意見は様々だったが、結

局のところ歴史研究ではどちらの立場でもよい、ということは強調された。

4. 日本における研究の役割

最後に日本での日中戦争研究は今後どうあるべきだろうか。すでに紹介したように、史料のデジタル化や大規模史料集の刊行もあり、中国では豊富な研究成果が発表されている。日本人研究者の減少を考えれば、こうした研究の全てを正面から受け取り、投げ返すのは至難である。ただ先行研究の把握や、史料分析など、日本の研究者は良き批判者として、いまだその存在意味は大きいと思われる。

またこれまでも言われてきたことだが、日本の研究を積極的に中国語に翻訳・紹介することも必要である。たとえ論文全体を翻訳することは難しくても、まずは1000字程度の要旨の翻訳でよいので、できるだけ多くの日本の研究成果を紹介することを目指すべきではないか。

中国史を研究する中国の研究者に「ひょっとすると外国語の先行研究があるかもしれない」という気持ちをもって研究に臨んでもらうことが重要なのである。

[注]

1日本でのシンポジウムは少なかったが、雑誌では管見の限りで『歴史評論』(807号)：「日中戦争を考える」、『歴史地理教育』(866号)：「日中開戦80年から学ぶ日中交流」、『年報日本現代史』(22号)：「日中戦争開戦八〇年」、『前衛』(950号)：「盧溝橋事件八〇年と日本の戦争」、『軍事史学』(53卷2号)「日中戦争八〇周年」が、それぞれ日中戦争80周年にちなんだ特集を組んだ。また『週刊金曜日』(25卷30号)は、『日中戦争全史』(上下、高文研、2017年)を上梓した笠原十九司による「7月7日の盧溝橋事件から80年」を掲載した。この他、論文集として黃自進・劉建輝・戸部良一編『〈日中戦争〉とは

何だったのか——複眼的視点』(ミネルヴァ書房、2017年)、また日中戦争の国際共同研究の成果として、波多野澄雄・久保亨・中村元哉編『日中終戦と戦後アジアへの展望』(慶應義塾大学出版会、2017年)が上梓された。